



Title	エドモンド・ドゥ・ヴァール著 『バーナード・リー チ再考 スタジオ・ポタリーと陶芸の現代』 思文閣出 版 2007年
Author(s)	大長, 智広
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 142-145
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53384">https://doi.org/10.18910/53384</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エドモンド・ドゥ・ヴァール著

『バーナード・リーチ再考 スタジオ・ポタリーと陶芸の現代』

思文閣出版 2007年

大長智広／愛知県陶磁資料館

タイトルの『バーナード・リーチ再考』とは、本書の内容と性格、そして現代陶芸を取り巻く現状に照らして鑑みると非常に示唆に富んだものであることがわかる。

1887年に香港で生を受けたバーナード・リーチは、エッチングを教えるために来日し、偶然に出会った楽焼の絵付け体験に魅了され、やきものの世界へと入っていく。そして日本では柳宗悦らとの交友関係に象徴される民芸派の巨匠として、また東洋と西洋の橋渡しをする唯一の芸術家として今日まで高く評価されてきた。日本におけるその高い評価は、これまでに外国人の作家としては異例ともいえるほど幾度となく回顧展が開催されてきたことからわかる。

しかしながら、これまでに開催されてきた展覧会、リーチの残した作品、書物、言説、幅広いようで閉じられた交友関係、そして日英両国に今日まで残る巨大な影響力等にあらためて目を向けると一つの疑問が湧きあがってくる。それは「日英両国において陶芸界の巨匠として評価され、その後の陶芸家の象徴となったバーナード・リーチとは一体いかなる作家であり、その評価はどこに由来するのか」ということである。

本書は、英国人の陶芸家で批評家でもあるエドモンド・ドゥ・ヴァール氏の論文を中心に、日本の現代陶芸研究者の代表的な一人である金子賢治氏との対談の他、日本のリーチ研究の第一人者である鈴木禎宏氏ならびに金子氏の解説などで構成されている。本書の主な構成は以下のとおりである。

- 1 バーナード・リーチ（ドゥ・ヴァール）  
ルーツを求めて——著述家リーチ（ドゥ・ヴァール）  
〔解説〕エドモンド・ドゥ・ヴァール氏の『バーナード・リーチ』について（鈴木禎宏）
- 2 癒しと再生——陶器の真の生命（ドゥ・ヴァール）  
陶芸——新たな歴史の必要性（ドゥ・ヴァール）
- 3 〔対談〕陶芸家のリーチ研究とスタジオ・ポタリー（ドゥ・ヴァール&金子賢治）  
〔解説〕現代の工芸と craft, そして民芸——エドモンド・ドゥ・ヴァールのリーチ論に学ぶ——（金子賢治）

本書の構成が示しているように第一の特徴といえるのは、ドゥ・ヴァール氏によるリーチ論を単純に翻訳しただけのものではないことである。これは日本の研究者が、現代陶芸研究を背景とした独自の視点を通じてドゥ・ヴァール氏のリーチ論に言及していくことで、東洋と西洋の架け橋を自認していたバーナード・リーチをめぐる日英両国の現代陶芸観が強く反映されたものとなっている。そしてリーチをこのように日英両国からの視点で捉え直し、互いの認識的ずれを確認し、修正する試みは今回がほとんど初めてといえるものである。

本書の根幹をなすドゥ・ヴァール氏によるリーチ論の注目すべき点の一つは、リーチの文献や制作活動、交友関係等を詳細に整理し、

互いに関係づけていくことで、近代的芸術観を有する個人陶芸家としてのリーチと「個人陶芸家」として「生活の器」、つまり生活費調達のためのスタンダード・ウェア（定番商品）を制作するリーチという矛盾をはらんだ二面性を「奇妙な例外」という言葉を用いて鋭く指摘したところにある。このドゥ・ヴァール氏の指摘は、リーチ自身の言葉もあり、リーチ芸術の根幹として絶対視されてきた生活や用途性について、芸術作品制作と資金調達の為の制作という複雑に絡み合った関係を解きほぐすことで、そのレトリックを暴くものとなっている。

そしてドゥ・ヴァール氏によるリーチ論の注目すべきもう一点は、東洋と西洋の架け橋という従来のリーチ神話を解体し、陶芸家リーチの「真実」の姿を導き出すとともに、あらためてその位置づけと再評価を試みたことである。

東洋と西洋の架け橋というリーチ神話について、ドゥ・ヴァール氏は、東洋を代表する知識人としての柳と、西洋を代表する芸術家リーチといった閉じられた関係の中で互いに評価しあいながら形成されたものであることを指摘している。同時に、リーチが唱えるやきものの美的規範としての「宋の標準」についても、絶対的美の規範を構築することのあやうさに言及するとともに、それが「東洋を理解した唯一の作家」というリーチ像を形成する上でいかに効果的に働いたかについても明らかにするのである。

そもそも、日本ではドゥ・ヴァール氏のようなスタイルで活動する陶芸家、あるいは批評家・研究者はほとんど存在しない。しかしドゥ・ヴァール氏が陶芸家として活動する一方でリーチ研究を行うのは、リーチとの繋がりの中で始めた自身の創作活動を、リーチを再考することによってさらに高い頂へと押し

上げようとする試みである。

そのことを示すように著者は序文で次のように書いている。

「私にとってバーナード・リーチについて書くということは、私がそこで育ちオリエンタリズムの修辞法を体現した陶器の世界を発見する方法であった。この種の「推理的探究」は私に作陶の自由を発見させた。」

「私にとって書くことと作ることとは極めて密接に絡みついている。事実、本書に収録された「バーナード・リーチ」も他のエッセイも、二十世紀において書かれたものと陶磁器がともに成長してきたその道を検討している。リーチの陶磁器の構成法は、ヨーロッパに陶磁器がどれほど君臨してきたかを彼に負っているように、本書の中で綿密に検討されている。私はまた、修養としてより深い理解とより広い観衆とをともに獲得するであろう陶磁器があるかもしれないという信念のもとに、陶磁器についての新しい執筆と新しい歴史を論じている。」

従来、産業として主に日常の器物を生み出してきた陶磁生産にあって、近代的芸術観を有した陶芸家の活動とは、やきものを生み出す産業的素材と技術を用いながら芸術としての表現活動を行なうとは何か、という問いに対する自問自答の繰り返しであった。そしてこうした問いに対する有効な答えがないまま、陶芸に内在する歴史性に対して無自覚的に陶芸の表現領域を拡大させ、表面的には狭義の「現代美術」との類似性を獲得したかに見える状況が一部において生まれている。しかしこれは反面において、現代陶芸という領域が曖昧であるために、単純に「現代美術」へと解体されてしまう危険性と隣り合わせの状況であるということを意味している。そのために、あらためて個人陶芸家の最初期の人物であるリーチを再考し、陶芸領域の再構築

へと繋げていく試みは、現代における必然的行為であるといえるのである。

このようにしてみると、ドゥ・ヴァール氏によるリーチ研究は、単に英国陶芸界に「リーチか否か」という考え方が存在するほかに、ある種絶対的な存在であるリーチ神話を解体し、歴史の一頁に押し込めることが目的ではないことがわかる。そしてそれは、陶芸表現を展開する上で独自の言語や理論を確立し、現代の造形芸術として陶芸表現を再構築するために必要な作業の一つであると位置付けることができるのである。

現代陶芸という分野は、未だ十分に歴史化されたものではなく、現在進行形で研究が進められ、同時に表現の方向性と可能性を模索している状況である。そして現代陶芸研究に関していうと、近年ようやく、最初期の作家に対して、作家の言説や作家と同時代になされた批評をそのままに受け取るのではなく、その創作活動に関する意味や重要性などを再考する作業が進められ始めたところである。その意味において、本書は、リーチに関する内容と共に、現代陶芸の再構築に向けて、従来は同時代的批評が先行してきた現代陶芸研究における歴史化の重要性を再確認させるものだといえるのである。

